

週刊 武四郎

第17号

2018年(平成30年)8月1日(水)
発行・松阪市

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

ヘンテコな髻まげの小さな男

松浦武四郎さんは背の低い人であったといえます。身長147センチくらい……今の感覚だと、ずいぶんと小さい感じがしますね。でも江戸時代は、日本人の身長が一番低かった時期で、男性の平均身長は155センチくらいだったといえますから、それほど小さかったわけでもないのです。

それよりも、武四郎さんは身なりに全然かまわない人だったそうです。蝦夷奥地の探検を終えて函館はこだてに戻ってきた武四郎さんは(探検中はもちろん床屋があるわけでもない)、髪も髻ひげも伸び放題、チョンマゲは長く額にまで垂れていたとか。

「松浦氏は常に丁髻ちんぎつを長く額の上まで伸ばし、すこぶる滑稽こっけいに見えた」

と、函館で武四郎さんに会った



人は記しています。どうやら「こんなに髻が伸びてしまうまで奥地を探検していたのだ」という武四郎さんなりのアピールだったみたいです。身の回りの世話をしていたアイヌの少年が鬱陶うっとうしいだろうと髻を切ったところ、しょんぼりしてしまったとか。

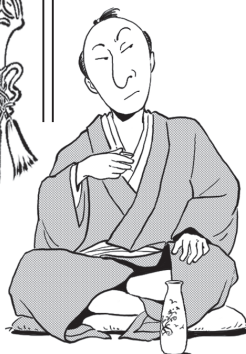
髻まげといえば、武四郎さんは最初の蝦夷地探検の前に伊勢神宮を参拝しようとしたところ、僧そう

形ぎようだったために入れてもらえなかったのですが(当時、坊主頭ぼうずずみの人は神社内に入ることができませんでした)、でも、そんなことでめげる武四郎さんではありません。神宮の前の髪屋かみやさんで(どうやら当時、禿はげ頭や僧侶など髻のない人のためにこうした店があったようです)、へ付け髻へつけまげをして参拝したと自伝には書き残されています。その頃の付け

髻のりまきは海苔巻のような棒の両端に付いた紐ひもを顎下あごしたで結ぶという簡単なもので、その珍妙な姿で武四郎さんは決意も新たに参拝して北へと向かったのです。のちに羽倉簡堂はくろかんどうという儒者は、武四郎さんを評してこんな風に書き残しています。
『その貌かおを見れば眇然びょうぜん(注・取るに足らないさま)たるのみ。然しかれどもその胸中の雄偉ゆうゐなること、その風貌に百千萬倍なるものがあること誰か知らんや』

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

